

陸奥國
名取温泉

ず、九軒の屋作り、各間廣に構へたり、地形は大抵平坦にして三四町程も有べけれど、東寄の山際よりの温液生ずるゆゑ、皆東の山寄に連住せり、西北の方に平坦續けども、少しく低く、古は爰等も一面の湯湖にて有し事ならん、今も兼葭のみ生ひ茂れり、扱此所より上州沼田領への間道あり、

〔類聚名物考〕地理三十五〔名取御湯〕なとりのみゆ 陸奥

〔奥羽觀蹟聞老志〕名取郡名取御湯

在名取上流秋保村、郷人曰秋保温泉、相傳古昔勅封之地也、故以御湯而稱之、

按、御湯二文字、非稱本朝、中華亦稱之、古詩所謂、有御湯搖蕩雙龍影、又是胡兒簇馬看句、

〔大和物語〕上をなじ兼盛、みちのくに、て閑院の王のみこの女にありける人、くろつかといふ所に住けり、略中かくてなとりのみゆといふ事をつねたゞのきみの女よみたりけるといふなむ、このくろづかのあるじなりける、

大空の雲のかよひ路みてしがなとりのみゆけばあとはかもなし

とよみたりけるを、兼盛のおほぎみおなじところを、

まほがまの浦にはあまやたえにけんなどすなとりのみゆるときなき

となんよみける、

〔秋保日記〕寛延四年、公務のいとまあるころ、城西の秋保村にまかりて温泉に浴し侍らんとて、八月三日になんおもむき侍りけるに、中塚氏廣茂のぬしも、同じくまからんとて、草庵に來りていざなひ出ぬ、朝のほどより空くもりて、やがて小雨ふり出ぬれば、雨つゝみなどとかく物して行くまゝに、ほどなく仙府を離れて、村徑田畝に道をもとむ略中

申の時ばかりに、雨こまかになりぬ、猶空翠客衣をうるほして、よもをのぞむに、朦朧たる中烟り